

ラメチャップとサンクに義援金を届ける

特定非営利活動法人ミランクラブジャパン
理事長 マナダール マダーブ ナラエン

2015年4月25日のネパール大地震から3ヵ月が経過し、政府の発表は7月20日現在、死者9,140人、負傷者30,000人であった。カトマンズ始め周辺の多くの郡の町、村が壊滅的な状態になったことは前回の会報に掲載した通りである。多くの家屋が倒壊し一部の世界文化遺産なども壊滅状態で、観光立国のネパールは想像以上の大きな損失を受けている。政府や多くの団体が支援を行ってはいるが、必要とされている地域のほんの一部である。緊急支援を行っていた海外からの団体は殆どが帰国した。今は現地の支援団体を中心に活動が展開されている。ネパールでの復興は少なくとも10数年はかかると言われている。

6月27日ラメチャップ郡ナグダハ村へ支援物資を届けた。朝4時半に出発準備、6時半に出発、カトマンズから128kmの道中は殆どが舗装されていない山道、途中で途中で見える倒壊した村々の家屋の多さに驚き、突然現れる地滑りで通行困難な道避け、11時半に目的地に到着。一行はMCN アマル・マリ副会長、サガル・マナダール会計担当、マノズ・シュレスタ役員、シンドゥパルチョク、ドルカ、ラメチャップ、3郡のコーディネーターのブペンドラ・パクリン氏、メヌカ・マナダール、コーディネーターのラミタ・マハルジャンとスジナ・バジュラチャルヤだった。



雨宿りする被災者

被災した里子11名、支部関係者5名にシュリブッダジャナプリエ高校に集ってもらった。雨季のこの季節の雨で配布が2時間遅れた。その間一行は里子たちの家々を見て回った。午後2時頃から前回の被災地と同じトタンシート、釘、鉄線など仮住まいの材料を配った。ラメチャップ郡のニマイ・タマン支部長は感謝の言葉と共に復興への第一歩としてミシンの貸し出しを希望された。土曜日の休日であったためか村では震災後2ヶ月の追悼が行われていた。カトマンズへの帰宅は夜8時となった。

7月10、17日、2回に分けてラリットプール郡サンク村を訪れたのは、アマル・マリ副会長、サガル・マナダール会計担当、コーディネーターのラミタ・マハルジャンだった。カトマンズから約20kmのサンク村は幹線道路ができるまではチベットのラサとの交易で栄えた村で、カトマンズから近いこともあり、物資は手に入れやすい。それに加え、震災後の日数の経過で家を失った人々は親戚に身を寄せたり、自力で粗末な仮住まいを用意し始めていたこともあって、現金を渡すことになった。



義援金を渡すサガル氏

10日は被災した里子、元里子と支部関係者の14名に1万ルピーずつ、17日も同じく10名に1万ルピーずつ手渡した。サンク村では元里子のラクチュミ・シュレスタが里子たちの世話役になっていて、

2日間同行した。義援金の配布後3時間近くかけて皆で村を視察した。サンクでは倒壊を免れた家は少なく、ラクチュミの家も住めない状態で、親戚の家に身を寄せているようだ。



義援金を渡すマリ氏

これからもグルカ郡やトカ村、バネパ町などの被災した里子たちへの支援が続く。順次報告したいと思う。

授業再開されたダルマスタリ学校では完成しつつある仮校舎へ8割の生徒が移った。仮校舎完成後、本校舎の修理が始まる。倒壊危険の<赤>ステッカーを貼られた職業訓練所と図書室は、危険度の大きい職業訓練所から解体工事が始まった。図書室は現在閉鎖されており、費用の面から今後どうするか検討することになっている。比較的損害が少なかった寄宿舎の修理が一番最後になる。学校関係にかかる費用は岐阜のロータリークラブ様関係と積水ハウス様からの義援金を充てることに決まった。

現在、人手不足から大工の日当が高騰しており、以前の3倍位となっている。大工も足りず材料も品薄で、どこも費用がかかり過ぎるのと工期が大幅に延びることで頭を痛めている。それに雨季が加わり、ますます動きづらくなっている。6月訪ネした人の話によるとペットボトルのミネラルウォーターが以前の3倍になっていたとのことだった。これは明らかに便乗値上げで、政府は品物を隠して値段をつり上げたり、日用品の便乗値上げを厳しく取り締まっている。

先月号でお知らせしたガイリムディ村にあったミシンは瓦礫を取り除いた結果、

原形をとどめていなかった。(下記写真参照)



瓦礫から取り出されたミシン

今月号で掲載予定の支援件数の詳細は、これからも続く支援の終了後としたい。

この1ヶ月でまた多くの善意が集まり、皆様の優しさと行動する勇氣に感動と感謝の気持ちでいっぱいです。



10 教室分の仮校舎



完成した仮校舎で勉強する生徒たち



職業訓練所の2階部分の解体工事